

金剛寶戒寺便

<https://www.honkai-ji.jp>

令和八年一月二日発行 第二四二号

檀信徒の皆さま、新年明けましておめでとうございます。旧年中は多くのご厚情を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

昨年末は記録的な暖冬となりました。朝の鐘つきや勤行の冷え込みが緩むのは有り難いことですが、自然界の異変には一抹の不安も覚えます。本州では「熊」の出没が相次いだことも、その象徴かもしれません。人間と動物、あるいは人間同士。異なる存在が共存していくためには、単に物理的な距離を置くのではなく、互いの領域を尊び、認め合う「心の余白」が今こそ求められていると感じます。十二月の講習会では、仏教の修行「六波羅蜜（ろくはらみつ）」の一つである「忍辱」についてお話ししました。

■ 忍辱（にんにく）——それは「耐える」ことではなく「観る」こと

一般に「忍辱」と聞くと、歯を食いしばって理不尽に耐え忍ぶ姿を連想されるかもしれませんが。しかし、お釈迦さまが説かれた真意は異なります。忍辱の本質とは、苦しみの正体を正しく観（み）る「智慧」であり、何よりも「自分の心を壊さないための技術」なのです。

人生には、病気や事故、あるいは心ない言葉といった「避けられぬ苦難」が不意に訪れます。その際、私たちは「なぜ自分だけが」という感情の渦に飲み込まれがちです。しかし、その問いを「この出来事の背景には、どのような縁があるのか」「この経験をどう自分の糧とするか」という智慧の問いに置き換えること。それこそが、忍辱という修行の第一歩となります。

■ お釈迦さまとアーナンダの対話

お釈迦さまの有名な法話に、このようなものがあります。

ある時、説法中のお釈迦さまに激しい罵声を浴びせる者がいました。弟子のアーナンダは見かねて「私が追い払って参ります」と憤ります。するとお釈迦さまは静かに問いかけました。「アーナンダよ。贈り物を差し出されても、相手がそれを受け取らなければ、その贈り物は誰のものになるであろうか」「……それは、差し出した主（ぬし）のものと残ります」「その通りだ。私は彼の『怒り』という贈り物を受け取らない。ゆえに、その怒りは彼自身のものとして残るのだ」

現代のSNSや日常の人間関係においても、心ない言葉を「受け取らず」「返さず」「そのまま置いておく」という選択は、私たちの心に静寂をもたらす最強の盾となります。相手の怒りの炎を自分の心に入れない。この主体的な選択こそが、心の自由を保つ鍵なのです。

■ 「逃げる」こともまた、慈悲と智慧

ここで、大切なお伝えがあります。忍辱とは決して「不当な扱いに黙って耐える」という意味ではありません。

古来、仏教には過酷な忍耐を説く側面もありましたが、現代において最も優先されるべきは「命と心を守ること」です。肉体的な暴力や、心が壊れてしまうような環境からは、一刻も早く離れてください。その場を去り、身を守ることは敗北ではありません。自分を慈しむと共に、相手や他者にそれ以上の苦しみを負わせないという、崇高な「慈悲と智慧」なのです。

二月八日（日曜日）十四時から
法話の会「六波羅蜜の禅定について」
二月十五日（日曜日）十四時から
写経の会 参加費千円

昨年十一月三十日に行われた宇佐神宮開創千三百記念法要は快晴の中、盛会に終わることが出来ました。「世界平安の祈り」と題して真言宗、天台宗、宇佐神宮宮司様で執り行われた今回の法要を一言で例えるのであれば「和合」であったと思います。法要を終え、還列する時にその場は訪れました。足取りのままならない天台宗の総長様（九十年代後半）に合わせ、三宗派が誰もいわず足を止めたのです。その瞬間に全ての法要が整ったと感じたのは私だけではないと思います。 合掌